



# 鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第109号

2021年1月6日

## いのちのコミュニティづくり—生き生きと生きるために

NPO法人社叢学会理事長・京都大学名誉教授

藺田 稔

令和の御代3年の新春を迎えるに当たり、当学会会員の諸兄姉に対しお祝いを申し上げます。新年明けましておめでとうございます。

さりながら、申すまでもなく今年の年頭から新型コロナウイルス感染症のグローバルな跳梁という世界文明史的な危機が年明けまで引き続いて収まらずに、わが国においても、今年夏に延期した筈のオリンピック・パラリンピックさえ果たして開催できるか危ぶまれる事態となっています。それどころか、日本の現代社会を存続せしめている人々の生活、経済、文化の仕組みさえその根本から揺るがせにしかねない差し迫ったコロナ禍の拡大なのです。

そこで、私ども社会人の立場では、一方で疫学や医療看護の専門家による病疫被害の軽減に期待しながらも、他方で現代社会の多面的仕組みのほんの一端にでも存続に寄与する働きに参ずることを期待されているはずです。

たとえば、私のささやかな体験でいいますと、旧臘12月初旬の6日間に渉る神事と祭礼のうち三日目の例祭祭典と「夜祭」神幸祭を中心に連日の「神事」は常よりも厳粛に執行し、常には各神事に伴う祭礼行事は「三密」事態を避けて自粛という特例の形式で、どうやら無事に感染症発生の危険を避けることができました。

そのことに関連して特に指摘しておきたいことは、実は私を含めて10人の神職が12月3日例大祭執行を目指して11月30日から四日間の別火精進による参籠に入るに当たり、まず同月20日から各自謹慎生活を心掛け、同25日には揃ってPCR検査を受けて同28日には陰性の確認を取り、同30日に参籠して一同12月6日まで感染なく奉仕が叶ったことでした。

ところで偶然の符合というべきかもしれませんが、当社現行の年間祭祀に深く関連する貴重な近世地方(じかた)文書に、宝永6(1709)年の「秩父領百姓年中業覚」という名の、当時の町方(まちかた)役人(名主・割役)が地元代官所に提出した年間の生業・生活暦があります。

すべて興味深い内容ですが、特に本稿に関連しての項目では、まず正月20日より2月3日まで「妙見神事」とあり、また秋10月20日より11月3日まで「妙見神事二月之通ニ御座候」とあって、その春秋両度の十余日間にわたる「神事」の具体的内容は、「秩父郡之内」では「竹木伐不申候 普請鳴物等尤田畑江鋤入不仕候」「女者絹木綿之業相止候 男者くつわらじ縄むしろ等仕度候」とある、要するに、当時は旧暦の2月3日、今では新暦の4月4日の田植祭神事、また旧暦の霜月(11月)3日、今の新暦12月3日の夜祭(神幸祭)とを迎えての郡内全住民に及ぶ物忌み精進を指している言葉でした。少なくとも近世には「秩父大宮妙見宮」と崇められた当社の「妙見神事」といえば、地元領民が等しく10余日間のおコモリで心身を清めての神マツリであったということです。

現代における新型コロナウイルスという目に見えない寄生生物の感染を警戒しての謹慎生活と、祭神を迎えるための穢れの精進潔斎とが、今更ながら二重の意味によみがえったかのようです。





## 尾鷲の社叢と九木崎原生林

講 師：川端 守（熊野古道センター長）  
長谷川泰洋（社叢学会理事・名古屋産業大学講師）  
社叢案内：山本 和彦（三重自然誌の会）

**熊野古道の歴史と文化－据置願を中心に** 川端 守  
紀伊山地の霊場と参詣道は、神仏習合の聖地として世界遺産に認定され、参詣道の石畳や樹林は人の力で造られた文化遺産である。藩政時代の牟婁（むろう）郡は、和歌山県南部は南牟婁として口熊野代官所が、三重県南部は北牟婁として奥熊野代官所が管轄していた。北牟婁地区は大庄屋が治める長島・相賀・尾鷲・木本・北山の5組に分かれており、尾鷲組は北の馬越峠と南の八鬼山峠・矢ノ川峠を境に



組割りされていた。西国三十三所名所図会（嘉永4（1851）年）には、馬越峠と八鬼山峠の両図絵に石垣・お堂・茶屋が描かれており、馬越峠には船に乗った岩船地蔵が、八鬼山峠には三宝荒神立像が祀られていた。両石像に対して、明治初年の廃仏毀釈からの救済を願う地元民の「据置願」が残っており、岩船地蔵は廃棄、荒神像は存続となった。後に岩船地蔵は信者によって拾われ、今は熊野古道沿いの祠に安置されている。

### 東紀州の社叢と植生 長谷川 泰洋

三重県南部の東紀州地域は、熊野灘に黒潮が流れ、後方には山地が迫った地形で、県内で最も温暖で多雨な気候条件の下で、暖地性・海岸性の植物や生育北限となる植物が多いという植生の特徴がある。当該地域では過去に5回の環境省による自然環境保全基礎調査によって社叢を含めた特定植物群落調査が行われている。1988年の調査では、群落面積に大きな変化はなかったが、1998年の調査では、台風19号（1990年）による高木の根返り・幹折れ・整理後の駐車場化に加えて、スギの高木の盗伐も記録された。2020年に特定植物群落の11社叢（南から烏止野・神内・花窟・徳司・遊木・飛鳥・九木・高宮・島勝・

豊浦・長島の各神社）を対象に調査を行い、1980年の調査結果と比較したところ、草本種数は増加したが、シカの食害による暖地性を特徴づける植物やシダ植物が減少し、シカが食べない植物やつる性植物・ウラシマソウなどサトイモ科の有毒植物などが増えており、柵によるシカ食害のコントロールが必要である。一方、外来種の侵入・増加は見られなかった。

### 九木神社樹叢（国指定天然記念物）山本和彦



吉野熊野国立公園内にある九木神社社叢は1937（昭12）年に国指定された天然記念物。スダジイ・ホルトノキ・クスノキ・イスノキ等の高木層・クサマルハチ等の暖地性シダ類・ムギラン等の着生ラン・ミミズバイ・ヤマビワ等の常緑樹が暖地海岸部に発達した自然性の高いスダジイ・ミミズバイ群集で、約2万年前の最終氷期最寒冷期に紀伊半島南端に避難していた植物群に由来する。また、クサマルハチ（ヘゴ科）は1926（大正15）年に本州初のヘゴ科植物として九木神社境内で発見された三重県絶滅危惧種であるが、2008年頃からシカの食害を受け始め、現在は幼株が防護柵で保護されている。

★ 次回の中部研究会は、10月24日（日）～25日（月）の2日間、愛知県田原市伊良湖ビューホテル会議室での勉強会及び伊良湖神社社叢（国指定天然記念物）の見学を予定しています。ぜひ、ご参加ください。

## 東日本大震災社叢復興支援事業報告書を発行

8年間の全てを記録 現地調査員の生の声も 頒価 3,000円

今回の賛助会員神社社叢紹介は、神宮を取り上げる。神宮林は2013(平成25)年年次総会の見学会で木村政生・元神宮司廳宮林部長のご案内でつぶさに拝観させていただいた。ここでは木村氏によるシンポジウムの基調講演の宮域林の部分の概要を掲載する。なお、全文は会誌『社叢学研究』第12号に掲載している。

## 賛助会員神社の社叢

### 神宮



神宮林

#### 神宮

天照大御神を祀る皇大神宮(内宮)、豊受大御神を祀る豊受大神宮(外宮)をはじめとして、14の別宮、109の摂社・末社・所管社からなる。『日本書紀』によれば、垂仁天皇皇女倭姫命が天照大御神を祭る宮地をもとめて諸国を巡行し、五十鈴川のほとりの現在地を鎮座地と定めたとされる。全国8万有余の神社の本宗と仰がれている。

所在地：伊勢市氏館朝1

祭神：天照坐皇大御神・豊受大御神

大正7(1918)年の五十鈴川の氾濫で、1日の雨量が350mmで宮域林内の崩壊地が119ヶ所あったと記されている。昭和30年代の前半にはまだ少しは崩壊するところがあったが、現在はほとんど森林の崩壊は考えられない。宮域林内に入ると、大正7年の崩壊地だと思われるところが何ヶ所もあって、窪地になっているところが多い。そこはヒノキの植栽地として結構大きく成長しているが、林床がウラジロのシダなどに覆われているところが多い。

これだけの洪水が出たのは、おかげ参りの影響で、宮域林内は薪炭林として扱われ、裸山になっていたと思われる。この大洪水の結果、神地調査委員会ができ、第二宮域林の4千haの中で3千haの御杣山の復元として針広混交林を作ろうという神宮森林経営計画を作成した。これを受けて大正15年に当時の東大森林経理学教室が神宮宮域施業計画を作っている。

これによると、一回の遷宮用材がおよそ3千5百石あれば、風致保存、水源涵養などに全く害がないとある。これを検証すると、伐る面積は30haあればよいことになり、3千haの造林地ができれば、百回分の御用材が確保でき、持続可能なものとなる。

御造営用材として、ほぼ200年で胸高直径60cm、樹高30mになるのは間違いないということが推測でき、それからha当たり100本になるが、間伐を繰り返すことで、必ず10m間隔に100本残っていくということにはならないからギャップもできる。これに関しては、広葉樹が出てきてよいのではないかと考えている。

御造営材は、昭和4年に神宮の理想とされる遷宮ということで注文した材は1万7千7百5本、9千8百立方で、歩止まりを70%だとすれば、20年に1回32ha伐ったらよいことになる。その中に胸高直径1mを超える用材が36本要るわけで、だいたい1mを超えるのが155年、扉材として使える140cmを超えるのが227年だから、あと100年経てば、ほとんど宮域林から出る材料で遷宮は賄えると考えている。

大正15(1926)年の宮域林の林相図を見ると、ほとんどが幼齢の広葉樹林で、薪炭材として伐ったばかりの裸山もたくさんあった。大正8年の調査では裸山の中にアカマツがパラパラと生えた幼齢林だと書いてあるので、洪水がおこっても不思議ではない。

平成7(1995)年の林相図をみると、ヒノキ山の上にあるのがヒノキの天然林でここには胸高直径1m近いものもあるが、国立公園の特別保護地区に指定されているもので伐れないのではないだろうか。こういう初期の混交林はだいたい50年生の山で、中間層に広葉樹がはいっているということは、殆んどもう洪水をおこさない山になってきたと考えてよいだろう。1mを超えるヒノキにはバリバリノキ、中間層には常緑としてのカシなどがはいっている。これが理想の山なのではないかと考えており、たぶん200年ぐらいでこうなるのではないかとと思う。

理想とする山は瀧原の猿田彦の森で、ヒノキがあり、中間層に広葉樹、下にはヒノキの幼樹があるという形になっている。こういう択伐林形にもっていくのが理想だと思うが、500~600年かからないとこういう山にはならない。だから早く御用材をとるためには、現在の山のやり方を200年なり、300年近くは続けていかなければならないだろう。

明治33(1900)年からの蓄積の調査データを見ると、面積はほぼ5千5百haで変わらず、大洪水の時の30万立方ぐらいから、昭和30(1955)年には50万立方まで増えている。しかし、そこから40年までは増えていない。これは伊勢湾台風の被害で、その後、60万以上にまで増えたが、昭和60(1985)年から平成7(1995)年までは、材積はほとんど変わっていない。これはマツ枯れでマツが全部枯れてしまい、マツの材積がなくなったことによる。平成17(2005)年の調査によると、全林の蓄積は73万立方まで増えているから、何も起こらなければ、だいたい8千から1万立方まで増えると考えてよいだろう。

神宮宮域林の10年間の平均年間雨量は2千9百10mmぐらいで、平成8年には時間雨量が108mm降ったが、これだけ降ったのがわからないぐらい山から水が出なかった。つまり、現在の宮域林はこれで落ち着いたということだろう。

## 来年度の年次総会について

先般、社叢学会理事会を開催し、令和3年度年次総会の開催について協議いたしました。昨年、秩父での開催を1年延期しましたが、来年度につきましては5月29日(土)・30日(日)の予定で秩父神社では既に準備を進めていただいております。しかし昨今の状況に鑑み、開催の可能性も含め、開催形態などについて議論いたしました。

ここでは、社叢学会年次総会はエクスカージョンに特徴があるので、これを中心に考えたいということ、また、来年が社叢学会発足から20年目にあたるので、秩父での記念行事の実施も視野に考えたい、という意見が出ました。

いずれにせよ、来年5月時点での新型コロナウイルス感染症の流行状況が読めない現段階での決定は無理であることから、3月に開催の理事会で開催形態も含め、決定することとしました。

会員の皆さま方におかれましてはご不便をおかけいたしますが、今しばらくご猶予を下さいますようお願いいたします。

## book book book book book book

### 世界のどんぐり図鑑

徳永 桂子 原 正利(解説)

どんぐり愛に溢れた楽しい1冊が届いた。ブナ科植物の果実であるどんぐり132種を約1000点の細密な植物画で紹介、”草の陰にちょろりと見えた…小さなかわいいもの”であったどんぐりの多様性と謎にひかれて世界でどんぐり探しの旅を続けた筆者が、ブナ科10属の作画記録を達成したことを機に一書にまとめたもの。葉、樹形、樹皮、芽生え、花などの絵も秀逸で、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカの代表的などんぐりとそれを実らせるナラ科植物を網羅しており、ページを繰るごとにその多様性に目を見張る。

どんぐりの様々な豆知識をまとめたコラムもそれぞれに楽しい。さらに、<そもそもどんぐりって何?>などの疑問に答えてくれる解説は、先に『どんぐりの生物学』をものした原正利社叢学会理事が担当。どんぐりのすべてがわかる。

ステイホーム中に、身近などんぐりから世界に思いをはせることができる恰好の一書だろう。

平凡社 定価6千8百円+税

## 事務局から

● 謹んで新春のお慶びを申し上げますとともに、会員の皆さま方のご健勝をお祈り申し上げます。この紋切り型のご挨拶が今年は切実なものと感じられます。皆さま方におかれましてはコロナ禍を無事にお過ごしになっていらっしゃるでしょうか。昨年この欄に今年こそは平安にと書きましたことが、なんとも能天気な気がします。

さらにこれだけではありませんでした。豪雨や台風がさらに我々を苦しめ、世界に目を向けると洪水の一方で大規模な森林火災など、自然はどこまで過酷なのかと思わせる出来事が連続いたしました。

当学会におきましても活動を制約され続けておりますが、何とか社叢保護・管理に灯した火を守り続けていきたいと考えております。

克服されなかったパンデミックはありません。我々は必ずやこれを乗り越え、緑豊かな地球を次の世代に残さねばなりません。微力ながら今後とも力を尽くしてまいる所存です。今年も変わらず、種々ご協力賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

## 編集後記

オリパラかあ。。。と書いてから1年。まさか今年も使えるとは!! とはいえ、去年のをそのまま使うのはあまりにもヒドイ手抜き。てなわけでコロナを寄せ付けない3つの対策について一言。

まずマスクですな。これは寒くなると暖かくてなかなかよし。一時のマスク不足はどこへやら、専門店なるものもでき、百花繚乱。で、フジオカの自慢はなんたって手作り相撲柄ですな。11月の東京場所をTV観戦していると、色違いで同じ柄のマスクをつけている場内観戦の人が映った! おお!

次! フィジカルディスタンスね。事務局はたった一人だからディスタンスも何も。

で、3番目の換気。これがちょっと問題。だって寒いんだもん。時々ちょっと窓を開けて、やったことに。それより問題は電車ですわ! 一部の窓を開けているものだから寒い寒い。冷たい風がびゅーびゅー入ってくる。風邪ひくやんけ(あら、ごめん遊ばせ)!! 慌てて真冬用のコートを引っ張り出して装着。それでも寒いわ。

忘年会も新年会もない。。。ならば1人で美味しいモン食べるもんね。(藤岡 郁)

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号

TEL・FAX 075-212-2973

URL <http://www.shasou.org> E-Mail [shasou@ams.odn.ne.jp](mailto:shasou@ams.odn.ne.jp)

facebook <https://www.facebook.com/shasou>

社叢学会関東支部 〒368-0041 秩父市番場町1-1 秩父神社社務所内

TEL080-1514-5032 E-Mail [shasougakkai@hotmail.com](mailto:shasougakkai@hotmail.com)